

平成28年度 第2回 院内合同研究発表会抄録

期 日 平成28年10月5日(水)

会 場 講堂

座 長 白子 隆志(副院長 兼 第一外科部長 兼 麻酔科部長 兼 救命救急センター長)

脳卒中を発症して入院した外国人への対応

研壁 真和¹⁾ 荒木 菊絵¹⁾ 大矢 理枝子¹⁾
善名 里江¹⁾ 菅沼 智巳¹⁾ 都竹 智香子²⁾
井上 京子³⁾ 竹中 勝信⁴⁾

1) 高山赤十字病院 2病棟2階

2) 高山赤十字病院 看護部

3) 高山赤十字病院 1病棟4階

4) 高山赤十字病院 脳神経外科

【はじめに】

近年、当地域への外国人旅行者が増加している。旅行中に脳卒中を発症し、入院管理が必要となった症例を2年間で3例経験した。入院中の看護を通して、対応に苦慮したこと、その経験から得られた今後の課題を報告する。

【看護の実際】

苦慮したことは、意識レベルや神経所見の評価である。どの症例も、患者は日本語が全くしゃべれず、さらに、症状として意識レベルの低下、失語、構音障害があり、コミュニケーションの難易度を更に増加させた。脳卒中でなくとも、外国人とコミュニケーションをとることは難しい。不安などに対して、言葉が違う事によってニーズを満たした看護ができず、患者や家族への負担は大きかったと思われる。どの症例も同伴の通訳はおらず、コミュニケーションがとれないことで、お互いに伝えたいことがやり取りできない状況であった。何とかコミュニケーションをとるために、スマートフォンの翻訳アプリケーションを活用したり、日常使う単語を一覧表として作成し活用した。このような状況から、看護におけるコミュニケーションの重要性を再確認した。

今回の症例では、院内の外国語を話せるスタッフの協力によって、通訳として面談への同席、医療費や保険の説明を依頼した。この連携により退院につなげる事ができた。

【まとめ】

当地域では、今後も外国人旅行者は増えていく事が予想される。今後の課題として、文化の違いを理解することや、語学力を習得することが挙げられる。また、外国人患者を受け入れた際の、院内連携の強化、そして、行政を巻き込んだ体制づくりが考えられる。

【おわりに】

外国人に対しても、笑顔・まごころ・思いやりの精神で、より質の高い医療・看護が提供できるような病院になることを望む。

当院における下肢静脈超音波検査の現状

橋本 翔太

高山赤十字病院 放射線科

【はじめに】

一般的に下肢深部静脈血栓症(DVT)は脱水やがん患者、長期臥床、エストロゲン製剤の内服、妊娠や出産、手術後などの危険因子で発症するといわれている。そのなかで当院では整形外科領域の人工股関節置換術(THA)と人工膝関節置換術(TKA)の術前後に超音波検査による下肢深部静脈血栓症(DVT)検査を行っている。今回は、検査結果を振り返り、当院におけるDVT検査の現状を報告する。

【対象】

2013年1月～2016年3月までの4年間でTHAとTKAの術前後にDVTスクリーニング検査を行った患者176名(男性31人女性145人)

【調査項目】

・術前・術後の血栓発症数・手術部位別発症数・DVT発症率・BMI別発症数

【結果1】

術前血栓発見数：5名(2.8%) 術後血栓発症数：31名(発症率17.6%)

手術部位別発症数：THA 9名(発症率8.0%)、TKA 22名(発症率35.0%)

術後血栓発症部位：患側のみに発症：24名(77.4%)、健側または患側+健側：7名(22.6%)

血栓発症部位：患側 鼠頸部2.7%、大腿部2.7%、膝窩部2.7%、下腿部22.2%、下腿筋層内(ヒラメ静脈)69.4%、健側 下腿部50%、下腿筋層内50%

PEのリスクがあると言われていた近位型の血栓はほとんど認めなかった。

(THA 5.4% TKA 0%)

【考察】

TKAは手術部位が静脈血管の走行に近いため、血管侵襲を伴いDVTを発症する。また手術中にはターニケットを使用して血液を駆血しているためと考える。

下肢静脈エコー検査におけるDVTの確認の感度及び特異度は高いとされているが、静脈内の微小血栓やすべての静脈内血栓を検索することは不可能である。しかしPEのリスクになるような近位型の血栓の発見には有用であると考えられる。

【結語】

人工関節置換術は、血栓を発症する可能性は高く、また、健側にも発症する可能性を考慮して検査を行うことが重要であると考えられた。

術前にスクリーニング検査をすることは有用である。

術後のDVTの予防が重要であり、DVTスクリーニング検査において超音波検査は有用である。